

令和7年度普及情報活動事業

活力ある海匠農業をめざす普及活動



ねぎの産地維持に向けた様々な取組
「夏ねぎの調査」



銚子市若手露地野菜生産者交流会
「露地野菜の気象災害対策研修」



海匠農業経営体育成セミナー専門研修
「相互訪問：プロジェクト課題の進捗を確認」



サツマイモ「あまはづき」栽培支援
「貯蔵不要で早期出荷可能な新品種」

千葉県海匠農業事務所

発刊にあたり

海匠地域は、豊かな耕地と温暖な気候に恵まれ、野菜・畜産・水稻・花き等、バランスよく生産されています。農業者のたゆまぬ努力と関係機関の御尽力により、令和5年の農業産出額は954億円と県全体の2割強を占め、県内第1位を誇る農業地域です。しかし、生産資材の高騰、猛暑の影響は農業経営だけでなく、多方面にわたり大きな影響を与えています。そこで、常に本県農業をリードする「食の宝庫 海匠」の更なる発展に向けて、海匠農業事務所改良普及課では、

- 1 海匠農業を支える多様な担い手の育成・確保
- 2 海匠地域の力強い園芸産地の維持・発展
- 3 水田をフル活用した水田農業経営の安定化
- 4 海匠農業の発展を目指す経営体の体質強化

これらの普及指導課題を設定し、課題解決に向けて旭市、銚子市、匝瑳市、ちばみどり農業協同組合、試験研究機関などの関係機関や、農業者との連携のもとに普及活動を進めてきました。

このたびは、本年度の普及活動の中から、①資源循環を考慮した自給飼料生産の拡大支援、②ねぎの産地維持に向けた様々な取組、③サニーレタスにおける高温対策を目的とした品種比較、④水稻農家への設備投資相談会、⑤海匠農業士協会情報交流活動支援、⑥美味しさいっぱい、活気あふれる道の駅をめざして、⑦銚子市露地野菜若手生産者交流会についての7事例を成果として取りまとめました。

また、情報提供として、①海匠農業経営体育成セミナー専門研修における取組、②「あまはづき」栽培始めませんか、③だいこんの湿害対策の検証、④施設野菜の高温対策、⑤大玉トマトの高温対策、⑥畜産経営における暑熱対策、⑦太陽熱土壌消毒と薬剤を組み合わせたセンチュウ防除、⑧千葉県鉢花生産者連絡協議会の取組についての8事例を御紹介させていただきます。

さらに、試験報告として、海匠地域に適したより簡便なプール育苗の方法の検討について、御報告いたします。

これらの事例が地域の農業振興に御活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、普及事業に対して御理解と御協力を賜り深く感謝申し上げますとともに、今後とも、より一層の御支援をいただきますようお願いいたします。

令和8年3月

海匠農業事務所長

目 次

普及活動の成果

I 活動報告

1 普及活動成果発表課題（第25回千葉県普及活動成果発表課題）

（1）資源循環を考慮した自給飼料生産の拡大支援について . . . 1

2 成果報告

（2）ねぎの産地維持に向けた様々な取組 . . . 4

（3）サニーレタスにおける高温対策を目的とした品種比較 . . . 6

（4）水稻農家への設備投資相談会 . . . 8

（5）海匠農業士協会情報交流活動支援 . . . 10

（6）美味しさいっぱい、活気あふれる道の駅をめざして！ . . . 12

（7）銚子市露地野菜若手生産者交流会 . . . 14

3 情報提供

（8）海匠農業経営体育成セミナー専門研修における取組 . . . 17

（9）「あまはづき」栽培始めませんか . . . 18

（10）だいこんの湿害対策の検証 . . . 19

（11）施設野菜の高温対策 . . . 20

（12）大玉トマトの高温対策 . . . 22

（13）畜産経営における暑熱対策 . . . 24

（14）太陽熱土壌消毒と薬剤を組み合わせたセンチュウ防除 . . . 26

（15）千葉県鉢花生産者連絡協議会の取組について . . . 27

II 試験報告

（16）海匠地域に適したより簡便なプール育苗の方法の検討 . . . 28

III 令和7年度の主な普及活動 . . . 33

資源循環を考慮した自給飼料生産の拡大支援について

- 畜産経営の安定的発展を目指して -

活動事例の要旨

海匝地域は県内トップの畜産の農業産出額を誇る地域であり、大規模化が進む中、家畜ふん堆肥の利用拡大の必要性が高まっている。また、近年の飼料価格の高止まりにより自給飼料の増産による生産コストの低減が求められている。

そこで、利用度の低かった養豚農家の農地を活用した飼料生産や、水田を活用した二毛作生産への取組を支援し、自給飼料の生産拡大を図るとともに、畜産農家の生産コスト低減に向けた飼養管理技術・経営管理技術の改善への取組を支援した。その結果、自給飼料生産面積の拡大や、自身の経営の課題を明確化し、解決に取り組む経営体の増加につながった。

1 活動のねらい・目標

畜産経営の安定的な発展を目指すため、管内で自給飼料生産や堆肥散布を担う海上自給飼料生産組合に対して、自給飼料の生産拡大及び家畜ふん堆肥の利用促進を目指した。

さらに経営体によって異なる課題（規模拡大、省力化技術導入、生産コスト削減、生産性の向上、飼養管理技術、経営管理技術の向上等）の整理および実現可能な課題の解決方法の検討を行うことで、各経営体の課題明確化および解決への取組を支援し、地域の畜産経営基盤の強化を目指した。

2 活動の内容

(1) 水田を活用した二毛作生産の取組支援

海上自給飼料生産組合の自給飼料の生産拡大に向けて、限りある農地を有効に活用するため、稲 WCS の裏作としての飼料用オオムギ作付けへの技術的支援を行った。

具体的には収穫適期把握のための生育調査、飼料費削減に向けた生産コストの算出及び安全な給与に向けてサイレージ成分分析を実施した。また、オオムギ作付面積の拡大に向けて関係機関を集めた会議において、オオムギ作付けの必要性と表作のイネ WCS の栽培に影響がないことについて共有を図った。さらにはほ場管理システムの導入により、現在副組合長のみが把握している全ほ場の所在地や面積をシステムに落とし込み、見える化を図った。



写真1 飼料用オオムギ収穫の様子

(2) 養豚農家の農地を活用した飼料生産支援

養豚農家が所有する農地での飼料生産の取組は平成 27 年から開始しており、取組面積は拡大傾向にある。令和 6 年には海上自給飼料生産組合と養豚農家、酪農家で構成された「旭畜畜連携協議会」の立ち上げを支援し、養豚農家の家畜伝染病が発生した際に使用する埋却予定地を活用し、再生作業を行い、養豚経営で生じた豚ふん堆肥を畑に施用し牛用飼料作物を栽培するモデル事業（埋却地活用事例創出事業）を行った。再生作業は事業を活用して実施、堆肥散布は養豚農家が行い、飼料用トウモロコシの栽培、収穫及びサイレージ調製は海上自給飼料生産組合が行った。飼料用トウモロコシの栽培に関して施肥設計や生育調査等技術的支援を行った。

(3) 経営改善に取り組む畜産経営体の支援

課題を明確化し経営改善に取り組む畜産経営体の支援を行った。改善方法については、各経営体による課題の整理を支援し、経営体ごとに実現可能な課題解決方法の検討を促した。具体的には規模拡大、省力化技術導入に係る計画作成支援、自給飼料の生産拡大及び栽培技術向上によるコスト削減、暑熱対策による夏季生産性の向上を支援した。

また、飼養管理技術、経営管理技術の向上を目標に、牛群検定データの分析や農場 HACCP 認証に係る各種飼養管理データ記録等の分析と経営への活用について支援した。



図 1 養豚農家埋却地を利用した飼料生産

3 活動の成果

(1) 水田裏作における飼料用オオムギ生産による自給飼料生産面積の拡大

定期的な生育状況の確認により適期収穫が可能となり、良品質飼料を生産できたこと、生産コストの分析により輸入乾牧草と比較しても十分飼料コストの削減が可能となること、さらに関係機関の集まる場でオオムギ作付けが表作のイネ WCS の栽培に影響がないことや夏場の乳牛の粗飼料としてオオムギが適していることを共有したことで、令和 3 年に 8 ha だった飼料用オオムギの面積は令和 6 年に 21ha まで拡大した。ほ場管理システムについては、約 400 近くあるほ場の登録支援を行ったことで見える化した。今後は組合員が共有できる体制を整えていく。

また、他地域の飼料用ムギ研修会での事例紹介、全国自給飼料コンクールへの応募、畜産総合研究センターと連携した飼料用オオムギの栽培データ収

集、乳牛を用いた飼料用オオムギ飼養試験の検討等、新しい取組事例として他地域、関係機関に波及効果を与えている。

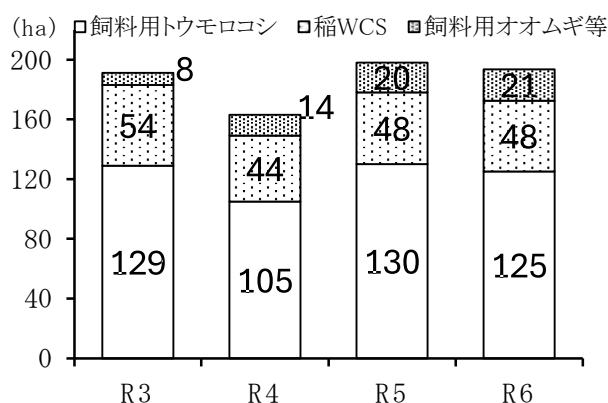


図2 自給飼料生産面積の推移

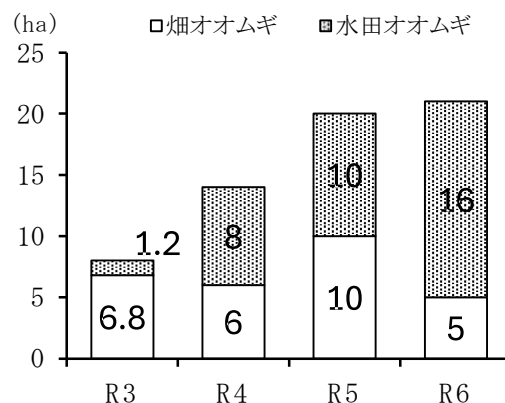


図3 飼料用オオムギ生産面積の推移

(2) 養豚農家と酪農・肉牛農家の「畜畜連携」の強化

モデル事業をとおして養豚農家と酪農・肉牛農家の連携を促したことにより、利用度の低い農地の活用に繋がり、自給飼料生産の拡大が可能となった。現在7戸の養豚農家と組合員の4戸の養牛農家が連携して自給飼料の生産拡大及び家畜ふん堆肥の利用促進に取り組んでいる。養豚農家の所有する埋却予定地や農地を活用した飼料用トウモロコシの栽培面積は平成30年6haだった面積が現在11.7haまで拡大しており、今後も面積は増加する見込みである。事業に取り組んだ養豚農家からは「今後取得予定の農地でも今回の取組を実施したい、耕作放棄等により荒れた農地を取得することがあるため、ほ場整備の補助事業は需要があるのではないか」という声があった。

(3) 経営改善に取り組む畜産経営体数の増加

経営体ごとに異なる課題について解決方法の検討を促した結果、令和7年までに36戸の経営体が課題を明確化し解決に向けて取り組んだ。そのうち規模拡大・省力化技術に取り組んだ経営体は14戸、飼養管理技術・経営管理技術の課題に取り組んだ経営体は15戸で、その中で経営改善に向けて自給飼料生産に取り組んだ経営体は10戸で、活動をとおして、より収量を確保できる作付体系への変更や収穫調製されたサイレージの成分分析による家畜への安全な飼料給与につながった。

4 将来の方向と課題

モデル事業をとおして養豚農家と酪農・肉牛農家の連携を促したことにより、今後他畜種間の連携がより普及することが期待される。今回の取組事例を養豚農家と養牛農家へ周知し、連携の輪を拡大していく。

また、他地域では耕種農家がトウモロコシサイレージを生産販売して順調な経営を行っている例もあるため、耕種農家との連携を検討する。

畜産経営体の経営改善への取組については、飼料価格・資材の高騰、暑熱対策等に対応した飼養管理技術・経営管理技術の改善に取り組む畜産経営体の支援を引き続き行い、地域内畜産経営の安定的発展を図る。

ねぎの産地維持に向けた様々な取組

- ねぎで Go! Go! -

1 課題の目的

近年、天候不順や新たな病害虫の発生により、ねぎに限らず農業現場では安定した生産が難しくなっている。さらに、高齢化による離農も加速しているため、対策が急務となっている。これらの課題に対応するため、様々な取組を実施している。

2 課題の背景

- (1) ゲリラ豪雨や夏季の高温等、天候不順により生産が困難になっている。露地栽培のため対策は限られるが、取組が可能と考える試験を実施した。
- (2) 難防除病害である「黒腐菌核病」や、これまで管内で発生がなかった「シロイチモジヨトウ」の大発生、夏場の「軟腐病」など細菌性病害の影響で、夏越しが難しくなっている。
- (3) 高齢化による離農が加速しており、一方で、Uターン就農者も増加しているため、知識習得や各種補助事業の支援が必要となっている。

3 普及活動の経過

(1) 高温対策試験の実施（写真1）

タイベック^{※1}による地温低下や黒色防風ネットによる遮光試験を実施した。また、JAちばみどりそうさ園芸部で毎年実施している品種比較試験でも、栽培の補助や調査・集計の支援を行った。

※1米国デュポン社が開発した特殊不織布の商品名



写真1 タイベック試験

(2) 病害虫対策の実施

ア 黒腐菌核病対策

「ピラジフルミド水和剤」による苗箱かん注処理や「ダズメット粉粒剤」の使用、新規登録薬剤の試験を実施し、防除効果の高い薬剤を選定して講習会等で紹介した。

イ シロイチモジヨトウ対策（写真2）

令和5年から、これまで管内で発生がなかった「シロイチモジヨトウ」が急激に大発生している。薬剤耐性があり、発生消長が「ハスモンヨトウ」より早いことから、薬剤防除の遅れや効果の低下、ほ場全体が食害により全滅する事例もある。そこで、フェロモントラップによる発生消長の把握、農林総合研究センター（以降、「農林総研」と略す）やJA全農ちばと連携し効果がある薬剤の選定、交信かく乱剤の省力的設置試験などを実施した。



写真2 シロイチモジヨトウの食害

ウ 軟腐病等の細菌性病害対策

近年、夏季の高温化・長期化により、ほ場で枯死する株が散見され、「暑さによる枯死」と考えていたが、農林総研に病害検定を依頼した結果、「軟腐病」であることが判明した。そのため、農林総研と連携し、現地で枯死株の病害検定を実施した。

(3) 新規ねぎ栽培者講習会の実施

JA ちばみどりが実施する「新規ねぎ栽培者講習会」に講師として技術指導している。既存農家の品目転換者、実家が農家のUターン就農者、土地持ち非農家の就農者、定年帰農者、移住者など、様々な参加者が受講している。

4 普及活動で得られた成果

- (1) 高温対策では、タイベックや遮光を実施した結果、地温低下効果は認められたが、タイベック区・無処理区ともに腐敗株が多くなり、途中ですき込んでしまった。遮光試験では、無処理区より生育が悪く、細くなる傾向が確認された。気候変動に対して技術が追いついていない現状である。品種比較試験で夏越し性の高い品種が判明しつつあり、情報提供を行った。
- (2) 病害対策について、黒腐菌核病では「ピラジフルミド水和剤」による苗箱かん注処理が最も効果的で、土壌消毒よりコストも低いため管内で普及している。農家のロコミ効果も高く、ほぼ病害が見られなくなった。シロイチモジヨトウ対策では、発消長調査により年次変動が大きいことが分かり、発生ピークに合わせて効果の高い薬剤による防除を呼びかけている。交信かく乱剤の省力設置では約80%の交信かく乱効果が確認できたが、無処理区と比較して食害率に違いはなかった。枯死株の原因究明については、細菌性病害の原因菌が複数あること、糸状菌やセンチュウ害もあることが判明した。細菌性病害では、原因菌が分かっても薬剤防除は期待できないため、品種比較試験結果と併せて夏越し性の高い品種の選定を行った。
- (3) 新規ねぎ栽培者については、一時期講習会参加者がJAへのねぎ出荷に繋がらないこともあったが、ここ2年ほどは出荷に繋がる事例が増えている。

5 問題点と今後の展開方向

高温対策については、技術試験では良い結果が得られなかったが、品種比較や農家からの情報で良い品種が見つかり、講習会で紹介し、現地での夏越し性を確認していく。シロイチモジヨトウ対策では、交信かく乱剤のさらなる省力設置方法を試験し、普及に向けて情報収集と情報発信を並行して行う。細菌性病害対策では、薬剤だけでは対応できないため、関係機関と連携し病害に強い品種の選定を進める。高齢化対策では、移住者を含め、新規ねぎ栽培者の受け入れに関してJAや市役所と連携し、円滑な支援体制を構築していく。また、ねぎは8~10月に出荷できないため、露地で端境期に収穫可能な品目との組合せについて検討を進め、周年で所得向上を図り、雇用環境の整備も目指していく。

サニーレタスにおける高温対策を目的とした品種比較

- 高温・湿潤の秋を、鮮やかに乗り切る -

1 課題の目的

近年の気象変動により、10月下旬～11月上旬は高温・湿潤化傾向にある。サニーレタスに特徴的な赤紫色の発色は、低温・乾燥条件で促進されるため、気象変動による発色の低下が危ぶまれている。そこで、サニーレタスの栽培が盛んな旭市飯岡地域の生産者ほ場において品種比較試験を実施し、高温・湿潤条件での栽培に適する品種の検討を行った。

2 課題の背景

- (1) 令和6年の10月下旬～11月上旬は、顕著な高温・湿潤条件となり（図1）、11月中～下旬出荷のサニーレタスでは、葉の赤紫色の発色が乏しい状態での収穫が多く見られた。
- (2) 11月出荷のサニーレタス栽培において、旭市飯岡地域の多くの生産者は「晩抽サーフレッド（横浜植木）」を主に栽培している。

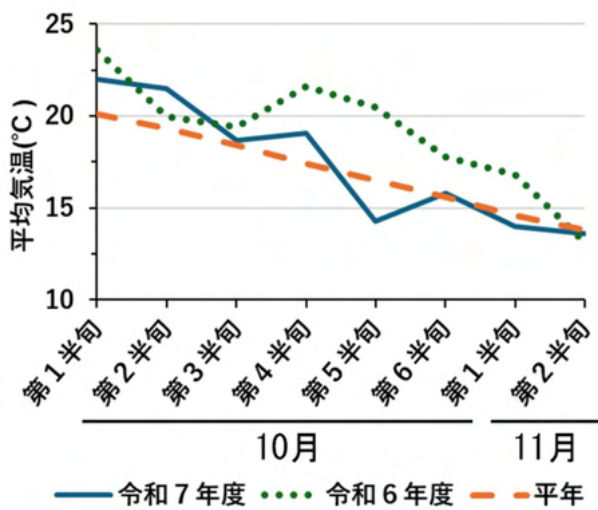


図1 半旬(5日間)の平均気温

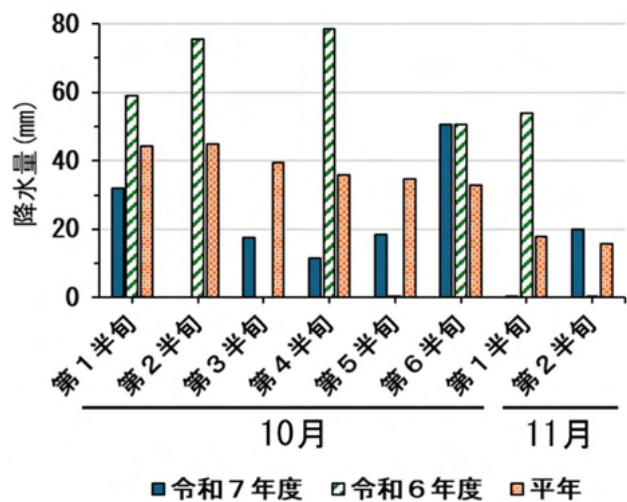


図2 半旬(5日間)の合計降水量

3 普及活動の経過

栽培概要

- (1) ほ場A（栽培品種：「晩抽サーフレッド」、「UC-201」）
は種：8月30日、定植：9月20日、
収穫：「晩抽サーフレッド」10月29日、「UC-201」11月4日
- (2) ほ場B（栽培品種：「UC-201」、「晩抽ディープパープル」）
は種：8月25日、定植：9月15日、
収穫：「UC-201」10月30日、「晩抽ディープパープル」11月4日

4 普及(調査)活動で得られた成果

(1) 生育経過

発芽率は品種間で大きな差は無かったが、定植直後の「晩抽ディープパープル」では高温・乾燥が原因と考えられる欠株(1~2割程度)が見られた。その後の生育では、「晩抽サーフレッド」と比較して「UC-201」は2~3日遅れ、「晩抽ディープパープル」は7日ほど遅れる傾向があった。赤紫色の発色は「晩抽ディープパープル」が優れ、「UC-201」は「晩抽サーフレッド」と比較してやや劣る結果となった。

表1 11月上旬出荷の各品種における生産者評価

	晩抽サーフレッド	UC-201	晩抽ディープパープル
発芽率	良好(90%以上)	良好(90%以上)	良好(90%以上)
生育速度	—	2~3日程遅れる	5~7日程遅れる
色回り	○	○~△	◎
晩抽性	○	○	○
草勢	やや開帳性	やや立性	やや開帳性
総評	○	◎~○	○~△

※評価基準 ◎:優れる ○:やや優れる △:やや劣る

(2) 「UC-201」栽培時の留意点

慣行栽培では「晩抽サーフレッド」の方が赤紫色の発色がやや優れる。発色を促すには、トンネルの換気を強めに行う必要がある。晩抽性はあるものの、9月中~下旬より早い定植は抽苔のリスクがある。また、寒さに強く厳寒期の生育も良好だが、葉がやや薄いため霜害には弱い。霜が降りやすい時期・場所では「ハワイ2号(横浜植木)」等の栽培が適している。

(3) 「晩抽ディープパープル」栽培時の留意点

高温・湿潤条件でも赤紫色の発色が良好である。晩抽性も強く、9月中旬ごろの定植でも抽苔しない。一方、定植直後に高温・乾燥が発生した場合は欠株のリスクがあるため、過度な早植えは控えた方がよい。定植後の欠株対策としては、適度なかん水が有効である。また、早生品種ではないため、「晩抽サーフレッド」と同じほ場に定植すると収穫時期が重ならない点に注意が必要である。

5 問題点と今後の展開方向

令和7年度作では、収穫期が顕著な高温・湿潤条件ではなかったため、全品種で出荷に影響のない程度の発色が見られた。気象変動に対応するため、今後も品種比較試験を継続し、品種特性への理解を深める必要がある。

「UC-201」の発色については、トンネル展張前は「晩抽サーフレッド」より赤紫色の発色が強く示していた。栽培条件によっては収穫時の発色が「晩抽サーフレッド」より優れる可能性も示唆される。今後は品種に合わせた栽培方法を検討し、各品種のポテンシャルを最大限に活かせるよう努めていく。

水稻農家への設備投資相談会

－ 旭市干潟地区を中心に －

1 課題の目的

大規模水稻経営者は、これまで米価低迷による厳しい経営環境から機械・施設への設備投資を見送ってきたが、令和7年産米の価格上昇に伴い、設備投資を行う経営者が増加している。設備投資にあたっては、栽培技術に関する知識・経験だけでなく、各種施策や税制への正しい理解、財務状況を踏まえた計画的な投資活動が必要である。

農業事務所では、設備投資に係る経営判断に悩む経営者に対して個別相談会を実施し、経営所得安定対策、中小企業投資促進税制^{*1}や中小企業経営強化税制^{*2}の活用について紹介を行った。

2 課題の背景

- (1) 経営所得安定対策では、飼料用米や加工用米に取り組んだ場合、国からの交付金の範囲内で機械・施設等の取得に必要な資金を必要経費として積み立てることができる制度があるが、認知度が低いのが現状である。
- (2) 同様に、中小企業投資促進制度や中小企業経営強化税制についても、制度や有効な活用方法が農業者にはほとんど知られていない。
- (3) これらの制度を活用する際、申請手続き（申請書の記入方法が分かりにくい）や簿記記帳の方法が特殊であり、税理士や公認会計士でも知らない場合がある。そのため、制度の利用にあたっては普及指導員による支援が必要と考えられる。

3 普及活動の経過

- (1) 令和7年12月、JAちばみどりが事務局を務める「青色申告会」主催で、銚子税務署と農業事務所が連携し、大規模水稻農家を対象に経営研修会を実施した。税務署からは中小企業投資促進税制等について情報提供があり、農業事務所は基盤強化準備金制度^{*3}について説明した。
- (2) 令和7年12月から令和8年1月にかけて、JAちばみどり営農センター干潟や農業事務所内で、基盤強化準備金や中小企業投資促進税制の活用を念頭に、希望者に対して個別カウンセリング・コンサルテーションを行い、有効な活用策について情報を提供した（写真）。
- (3) 複雑でわかりにくい税制の申請手順については、(2)で支援を行った。

※1 「中小企業投資促進税制」

中小企業庁の制度で、中小企業者や個人事業主を対象に、機械設備等の対象設備を取得した場合、取得価格の30%の特別償却または7%の税額控除を選択して適用することができる。この制度の適用期限は2027年3月31日までとなる。制度の条件など、詳細は中小企業庁ホームページを参照とする。

<https://www.chusho.meti.go.jp/zaimu/zeisei/tyuusyoutokigyoutousisokusinzeisei.html>

※2 「中小企業経営強化税制」

中小企業庁の制度で、中小企業等経営強化法の認定を受けた経営力向上計画に基づき、対象設備の取得や製作等をした場合に、即時償却又は取得価額の10%の税額控除（資本金の額等が3,000万円超の法人は7%）が選択適用できる。

本制度の適用を受けるためには、①生産性向上設備（A類型）、②収益力強化設備（B類型）、③経営資源集約化設備（D類型）、④経営規模拡大設備（E類型）を導入して実施する経営力向上計画の認定を受けることが必要になる。この制度の適用期限は2027年3月31日までとなる。制度を受けられるかなど、詳細は中小企業庁ホームページを参照とする。

https://www.chusho.meti.go.jp/keiei/kyoka/kyoka_zeisei.html

※3 「農業経営基盤強化準備金」

経営所得安定対策等の交付金を活用して、計画的に農業経営の基盤強化（農用地、農業用の建物・機械等の取得）を図る取組を支援する制度である。

認定農業者又は認定新規就農者が、経営所得安定対策等の交付金を農業経営改善計画などに従い、農業経営基盤強化準備金として積み立てた場合、この積立額を個人は必要経費に、法人は損金に算入でき、さらに、農業経営改善計画などに従い、積み立てた準備金を取り崩したり、受領した交付金をそのまま用いて、農用地、農業用の建物・機械等を取得した場合、圧縮記帳できる税制上の特例である。この特例の適用を受けようとする場合には、一定の方法で記帳し、青色申告により確定申告（初年は税務署に事前に届出）をする必要がある。

令和7年度以降、農業経営基盤強化準備金を積み立てる場合、農業経営基盤強化促進法に基づき市町村が策定する地域計画において農業を担う者として位置づけられていることが必須となる。制度の詳細は農林水産省ホームページを参照とする。

https://www.maff.go.jp/j/kobetu_ninaite/n_seido/junbikin_tetuduki_shiryou.html

4 普及活動で得られた成果

大規模水稻生産者は、米価の変動により経営環境が大きく変わるため、計画的な設備投資を行い、運転資金を確実に確保しつつ、内部留保の充実に努めることが求められる。本活動を通じて、各制度のメリット・デメリットへの理解が深まり、経営者能力の向上が図られた。



写真 個別カウンセリング・コンサルテーション

5 問題点と今後の展開方向

水稻経営では米価の年次変動が激しいため、設備投資には高い経営者能力が求められる。判断を誤ると、借入金返済のために資本金を取り崩し、運転資金の確保が困難になるケースも想定される。

水稻経営が安定的に継続できるよう、本活動を海匠地域全体に拡大し、大規模水稻農家の経営者能力向上を目指していく。

海匠農業士協会情報交流活動支援

－ 海匠農業の未来はオレたちが作る！ －

1 課題の目的

農業士は、地域における次代の担い手として活躍する農業者を社会的に評価する制度であり、営農経験を有し、地域農業の推進者として期待される 20 代から 40 代の農業者を県知事が認証している。この制度は昭和 52 年度から始まり、千葉県はこれまで約 1,500 名を認証している。県内各農業事務所単位で地区の農業士協会が組織されており、会の活動を通じて農業士自身の経営発展のみならず、地域農業の振興も期待されている。

それには、農業者同士を始め、関係する企業や団体、他産業等との交流による情報交換で様々なノウハウやヒント等を得る必要がある。目的は農業士協会が主体となり、規模を大きく幅広く情報交換活動できる場づくりとした。

2 課題の背景

「海匠農業士協会」は旭市・銚子市・匝瑳市の農業士で構成され、現在 68 名が所属する県内最大の地区組織である。世界情勢の影響による「生産コストの上昇」、実態の見えない「令和の米騒動」、経験したことのない「夏の酷暑」など、かつてない厳しい経営環境が続いている。このような状況下で農業経営を確実に行うためには、情報収集と人とのつながりが重要である。そこで、海匠農業士協会では視点を広げ、他世代の農業者やその団体、農業関連企業・団体・行政機関、他産業との情報交流を図るため、「BIG 交流会」などの交流の場を設け、普及がその活動を支援した。

3 普及活動の経過

(1) 海匠農業 BIG 交流会（写真 1）

それぞれの出荷組織や地区の生産者団体では意見交換会が行われているが、海匠地域の農業者団体や関係機関が一堂に集まり話し合う機会はこれまでなかった。7 月に大規模な会場を準備し「BIG 交流会」を開催、農業者及び関係機関、計 84 名が参加した。令和 6 年度に続き 2 回目の開催となった今回は、JA ちばみどり青年部、海匠農業経営体育成セミナー、海匠管内 3 市役所に加え、新たにアグリレディース海匠、日本政策金融公庫、千葉県農業共済組合も参集範囲に加えた。

また、交流会の前段では、日本政策金融公庫、農業共済組合、農業事務所から補助事業等について情報提供があり、参加者とともに情報を共有した。

(2) 銚子信用金庫との交流会（写真 2）

海匠地域で地元商工業者を顧客とする銚子信用金庫（以下、「銚子信金」と言う）については、既に取引を行う農業士がおり、銚子信金も地域農業への支援に注力する意向を示している。11 月に農業士 19 名と銚子信金各支店担当者が顔合わせを行い、銚子信金が取り扱う各種商品や経営支援策について説明を受け、後半は農業士の経営状

況や銚子信金の持つ地元商工業者等の情報について参加者同士で意見交換を行った。



写真1 海匠農業BIG交流会



写真2 銚子信金との交流会

(3) 農業活性化フォーラム in 海匠 (写真3)

「事業承継」をテーマにした海匠農業事務所主催の研修会では、テーブルトーク「海匠地域での事業承継は？どう引き継いだ？どう継がせる？」に「事業承継を受けた農業士」と「事業承継中の農業士」2名が登壇した。自身の就農時の決意や、責任ある立場になって気づいたこと、そして自分の子どもに「働く姿を見せる」ことの重要性など、農業経営を次世代につなぐための心構えについて活発な意見交換が行われた。



写真3 テーブルトーク「海匠地域での事業承継は？どう引き継いだ？どう継がせる？」

4 普及活動で得られた成果

「BIG 交流会」では、普段会議で顔を合わせるものの会話する機会が少ない参加者同士で意見交換ができた。特に農業士にとって、農業関係機関の担当者と時間をかけて情報交換できたことは有意義だったと考える。「銚子信金との交流」では、信金の商品や経営支援策について初めて知ることが多く、今回の交流会を通じて経営改善の選択肢が広がったとの声があった。「事業承継」をテーマにしたフォーラムでは、子へ更に引き継ぐために自分の働く姿を見せ、経営の結果を出していくことへの機運を高めることができた。

5 問題点と今後の展開方向

「BIG 交流会」については、地元の資材店や種苗メーカーなども招いて情報交換をしたいとの意見があり、参集範囲の拡大やテーマ設定が今後の課題である。銚子信金との交流会については、融資事例内容をより深く知りたいとの意見があり、他の金融機関も含めた経営学習の場づくりの支援も考えられる。また、農業士が持つ農業経営ノウハウを地域農業向上で活用できるよう、講師としての活躍の場づくりも支援していく必要がある。

美味しさいっぱい、活気あふれる道の駅をめざして！

- 女性農業者の参画で生産者も消費者も元気に -

1 課題の目的

旭市は県内トップ、全国5位（令和5年度）の農業産出額を誇る農業地域である。畜産、野菜、水稻など「食の宝庫 旭」と称される中、平成27年10月1日に道の駅「季楽里あさひ」がオープンし、令和7年10月に10周年を迎えた。これを機に、道の駅「季楽里あさひ」出荷者協議会の女性3名が令和6～7年度地域農業・産地力アップ女性リーダー講座^{*1}に参加し、女性の視点で作成したステップアッププランの実践と女性リーダーの育成を目的に支援を行うこととした。

^{*1} 千葉県主催の講座。農業振興や産地の活性化を目指し、女性の視点から地域農業や産地のプランを描き、行動できる女性農業者のリーダー育成を図る（以下、「女性リーダー講座」と言う）。

2 課題の背景

- (1) 道の駅「季楽里あさひ」は年々集客率・販売額ともに順調に伸び、特に大きな問題もなく10周年を迎えたが、出荷者を対象とした研修会はほとんど開催されず、出荷者協議会の会員同士のつながりも希薄であった。
- (2) 販売コーナーのPOPが少なく、野菜の食べ方などを尋ねられることが多い、売り場面積が狭いなど、様々な問題があることが予測された。しかし、改めて出荷者や消費者の意見を聞く機会もほとんどなかった。
- (3) 女性リーダー3名が女性リーダー講座に参加したことを契機に、女性の視点から問題点や課題を見出し、課題解決のためのステップアッププランを作成した。

3 普及活動の経過

- (1) 女性リーダーと道の駅役職者との課題の共有化と連携

女性リーダー講座において、道の駅「季楽里あさひ」の強み・弱みを整理し、「美味しさいっぱい、活気あふれる道の駅季楽里あさひ」を目標にステップアッププランを作成した。課題として、①旭市の農産物等のPR及び消費者にやさしい売り場づくり、②お客様に永～く愛され・楽しめる道の駅づくり、③新メニュー開発によるレストランの充実、の3つを設定した。

道の駅駅長と出荷者協議会会長にはステップアッププランの実践について打合せの機会を設け、合意を得ながら進めた。

- (2) アンケート調査による出荷者・消費者ニーズの把握

出荷者にも消費者にもやさしい直売所を目指し、まずは生産者のニーズ把握を目的に、出荷者協議会（会員308名）を対象に5月にアンケート調査を実施し、90名から回答があった。

また、消費者ニーズの把握とその反映を目的に、10周年記念イベントと併せて10

月 12 日に対面アンケート調査を実施し、201 名から回答を得て、良い点や改善点、要望等を把握することができた（写真 1）。

（3）旭市の食材を使った新メニュー開発の検討

道の駅レストランのメニューとして旭市の特産品を使った新メニューの要望があり、キュウリ農家の女性リーダーの提案でキュウリ麺を試作した。出荷者協議会の納涼会で試食会とアンケート調査を行った結果、道の駅での販売やレストランメニューへの採用を希望する会員が 50%以上となり、キュウリ麺は好評であった。

（4）販売力アップ研修会の企画・開催支援

アンケート調査の結果、施設や販売管理等に様々な課題が浮上した。そこで、課題解決のヒントとなる戦略等の習得を目的に販売力アップ研修会を企画し、35 名が参加した。公益財団法人千葉県産業振興センターの森脇菜摘氏による「販売力アップにつながる直売所のワンポイント」の講義を受け、POP の必要性やデザイン、店内レイアウト等について考える機会となった（写真 2）。



写真 1 積極的に消費者を捉えてアンケートを実施する女性リーダー



写真 2 講師の話に聞き入る参加者

4 普及活動で得られた成果

- （1）これまで道の駅出荷者協議会の役員はほぼ男性中心であったが、女性リーダー講座受講を契機に、女性の視点から研修会等を提案するなど出荷者協議会の活動が活性化し、大きな影響を与えた。
- （2）アンケート調査や販売力アップ研修会の開催を通じて、女性リーダー 3 名と道の駅駅長、出荷者協議会会長の絆が深まり、出荷者協議会会員のスキルアップと活動体制の構築が進んだ。今後も研修会の継続的開催などの要望が高く、販売力向上への意欲も高まっている。

5 問題点と今後の展開方向

アンケート結果から、販売コーナーの狭さ、販売レイアウトの改善、目玉商品の開発など多くの課題が明確になった。出荷者協議会として販売力向上に向けて優先順位をつけて改善に取り組む必要がある。

今後は、課題解決のための研修会等を継続的に開催し、さらに消費者にも生産者にもやさしい「道の駅季楽里あさひ」を目指す。

銚子市露地野菜若手生産者交流会

－ つながっていく、若い力 －

1 課題の目的

本取組は、銚子市の露地野菜若手生産者（経営体育成セミナー受講生・卒業生、JA 青年部を中心とする）を対象に、栽培技術や経営能力のスキルアップを図りつつ、生産者同士の交流の機会を提供し、次世代の産地を担う若手生産者の横のつながり「若手生産者ネットワーク」を構築することが目的である。

2 課題の背景

- (1) 新規就農者、特に離職就農者は、年齢や地域のつながりの希薄さから、JA 青年部に加入しづらく、自身の営農について気軽に相談できる仲間を探している。
- (2) 系統外の生産者や JA 青年部のない地域の若手生産者は、特に同世代の生産者との「横のつながり」が希薄となっている。
- (3) 銚子市の露地野菜はキャベツとダイコンが中心となる。生産者数が減少し続けている今、地域農業を支える次世代の育成は重要な課題である。特に気候変動や物価変動（生産物価格の変動、機械・資材価格の上昇）が激しい現在の営農環境に対応するため、スキルアップが必要である。

3 普及活動の経過

- (1) 令和 6 年度 研修会「除草剤の基本」、座談会「営農の悩みを語り合おう」
令和 7 年 1 月 10 日に第 1 回を開催し、16 人が参加した。前半は研修会で（株）丸和バイオケミカルを講師に招き、除草剤の基本的な知識や効果的な使用方法について学んだ。後半はグループワーク形式の座談会で、参加者が抱える課題を共有し、交流を深めた。（写真 1）
- (2) 令和 7 年度第 1 回 講演会「流通の視点から見える農業経営の明日」
6 月 13 日に開催し、17 人が参加した。講師に（株）農業総合研究所を招き、会社の成り立ちや現代の農業が抱える課題、競争を見据えた営農改善の心構えなどを学んだ（写真 2）。参加者からは「大きな刺激を受けた」と好評の声が上がり、閉会後の交流会でも活発な意見交換が行われた。
- (3) 第 2 回 研修会「夏の高温と対策の今」
7 月 17 日に開催し、17 名が参加した。銚子地方气象台より「今後の気象の見通し」、（株）サカタのタネより「夏用品種と高温対策資材」、東総野菜研究室より「高温対策に関する試験研究」と題して講義を受けた。近年の酷暑対策は露地野菜生産者にとって喫緊の課題であり、積極的な質疑応答が行われた。

(4) 第3回 視察研修「姉崎だいこんと作業 環境の整備」

9月18日に開催し、2名が参加した。作業環境の改善を目的とした視察研修で、JGAP 認証を通じた産地体制の構築や異物混入リスク低減のための整理整頓について学び、JA 市原市姉崎蔬菜組合の共同洗浄選別場（写真4）と組合長宅を訪問した。共同洗浄選別場では JA 市原市職員から運用状況や姉崎だいこんの販売について、組合長からは洗浄選別場の設置や姉崎だいこんの来歴、自宅の作業場や外国人実習生とのコミュニケーションについて学んだ。移動中の車内でも GAP の手法から学ぶ作業環境整備について農業事務所から説明を行った。



写真1 令和6年度
グループワークで交流を深める



写真2 令和7年度第1回
及川氏の講演に耳を傾ける参加者



写真3 令和7年度第2回
高温対策資材についての講演



写真4 令和7年度第3回
姉崎だいこん共同洗浄選別場視察

(5) 第4回 説明会「千葉県の補助事業」、座談会「それどうする？座談会」

11月7日に開催し、6名が参加した。前半は「高温対策緊急支援事業」「輝け！千葉の園芸」「経営発展支援事業」「世代交代・初期投資促進事業（世代交代円滑化タイプ）」等の補助事業について農業事務所企画振興課より説明し（写真5）、後半は機械や資材費の高騰に関する近況や対策について情報交換する座談会を開催した。



写真5 第4回
補助事業の説明を受ける参加者

(6) 第5回 研修会「露地野菜研修会」、座談会「チャレンジ座談会」

令和8年1月30日に開催し、10名が参加した。前半は農林総合研究センターから「台風後に多発するキャベツの細菌性病害対策」「かけっぱなしで大丈夫！キャベツのべたがけによる台風対策」「ダイコンのべたがけによる風害・潮風害対策」の3題について研究成果が紹介された。後半は「チャレンジ座談会」と題し、2026年に力を入れたいことをテーマに情報交換を行った(写真6)。さらに、交流会の範囲を旭市飯岡・海上地区に拡大することを踏まえ、会の名称を話し合った結果、『露地野菜研究会「うんならがs」(銚子の方言で「勢いをつける」の意)』に決定した(写真7)。

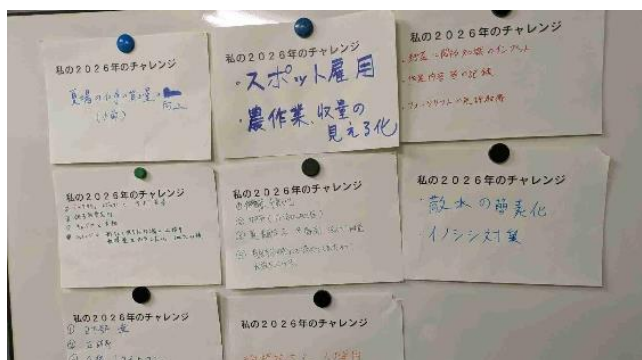


写真6 第5回 チャレンジ座談会
発表した2026年の「チャレンジ」



写真7 会の名前を相談
露地野菜研究会「うんならがs」

4 普及活動で得られた成果

令和6年の交流会開始時に、生産者からSNSを利用したチャットルームの立ち上げの提案があり、当日の参加者を中心に作成され、現在は17人が参加している。これが若手生産者ネットワーク構築の足掛かりとなり、栽培状況の情報交換や研修会等イベントの情報共有の場となっている。

スキルアップの面では、講演会や座談会を通じて自身の営農改善に取り組む生産者の姿が見られた。例えば、(株)農業総合研究所の講演に刺激を受け、販路拡大の検討を行う生産者が現れた。座談会では近年の気象変動への対策が話題となり、品種選択や病害虫対策の薬剤使用感などが多く議論された。また、労働力の確保や鳥獣害の発生状況なども話題となった。総じて本取組は、生産者が自発的に営農状況の改善に取り組むモチベーションアップにつながった。

5 問題点と今後の展開方向

若手生産者ネットワーク活動の拡大や、生産者のより自発的な活動を促すためには、若手生産者の団体立ち上げが望ましいが、まだ参加者の意識醸成が十分ではない。今後は、参加者のニーズに合った研修会や講演会、座談会を継続しながら、座談会で団体活動の構想を提案・議論し、会の活動に積極的なリーダー格の生産者のピックアップを行う。令和8年度を通じて準備を進め、令和9年3月の団体立ち上げを目指す。

海匠農業経営体育成セミナー専門研修における取組

－ 課題発見・解決のための手法を学ぶ －

1 活動のねらい・目標

海匠農業事務所では、地域農業の次世代の担い手を育成するため、就農直後の青年農業者を対象に「海匠農業経営体育成セミナー」を開講している。1年目の「基本研修」2年目の「専門研修」3年目の「総合研修」と3年間の研修講座であり、2年目の専門研修では、更なる専門知識の習得と、応用力・創造力の向上を目指しており、技術や経営の改善に関してプロジェクト課題を設定し、自ら解決する学習に取り組んでいる。

2 活動の内容と成果

(1) プロジェクト課題への取り組み

5月中旬の開講式と同日に、セミナー生ごとに「プロジェクト課題設定書」を作成した。自身が抱える問題を取り上げ課題化し、改善策の検討や必要な調査事項を計画、自ら解決し、翌年2月のプロジェクト発表会に向けて各自で進めていく。11月の研修では、セミナー生ごとに進捗状況を報告して意見を出し合い、課題の整理と今後の方向性を確認した（写真1）。

(2) 土づくりについての研修

堆肥・緑肥等の活用による土づくり、pH・ECのみの簡易土壌診断から、硝酸態窒素や交換性陽イオン、腐植などを含む詳細な土壌診断について数値の読み方に関する研修会を開催した。また、管内畜産農家の堆肥製造現場を視察し、近隣耕種農家へ堆肥販売、複合肥料の原料としての販売など、活用事例を学んだ。



写真1 プロジェクト課題の進捗状況を報告



写真2 体の動きとセルフケアを学ぶ

(3) 農業労働改善についての研修

セミナー生から提案があり、理学療法士を講師に招き、農作業中の姿勢や動き、起こりやすい痛みや症状、適切な体の使い方について講義を受け、農作業後の体のケア方法としてストレッチを体験した（写真2）。各自、自身の身体の特徴や抱える問題に気づき、ケア方法も同時に学べたことで、農業を健康的に続ける自信をつけることができた。

(4) 今後の展開について

最終年となる総合研修では、各自経営計画の作成に向けて、経営分析や財務計画の立て方の講義、家族経営体や大規模経営体の視察などを通じて経営者としての資質向上を目指した研修会を開催していく。

「あまはづき」栽培始めませんか

－ 新しいサツマイモの栽培を幅広く支援します －

1 活動のねらい・目標

海匝地域の主にキャベツ・ダイコンを栽培している露地野菜生産者では、晩夏から中秋にかけて出荷できる品目が少なく、作業の継続性や所得の安定性の面で課題がある。

そこで、早期出荷が可能で貯蔵不要（不可）なサツマイモ品種「あまはづき」の栽培に注目が集まっている。今後、地域や市場のニーズが合致していることから、海匝地域での普及拡大が期待されており、農業事務所も昨年から苗供給、ほ場準備、栽培支援、出荷調製まで関係機関と連携し、幅広く支援を行っている。

今年度は、他のサツマイモ品種より短期間で品質変化する点に着目し、「あまはづき」の流通時及び流通後の食味変化等について調査を実施した。この調査により、生産者、JA、全農、市場、小売が安心して「あまはづき」を販売できる情報の提供を目指した。

2 活動の内容と成果

(1) 「あまはづき」

の出荷量が多くなる9月上旬から10月上旬にかけて、出荷箱内に温湿度計を設置し、流通時の温湿度変化や流通後の棚持ち性を評価した。また、収穫後の糖度(Brix値)の変化について、

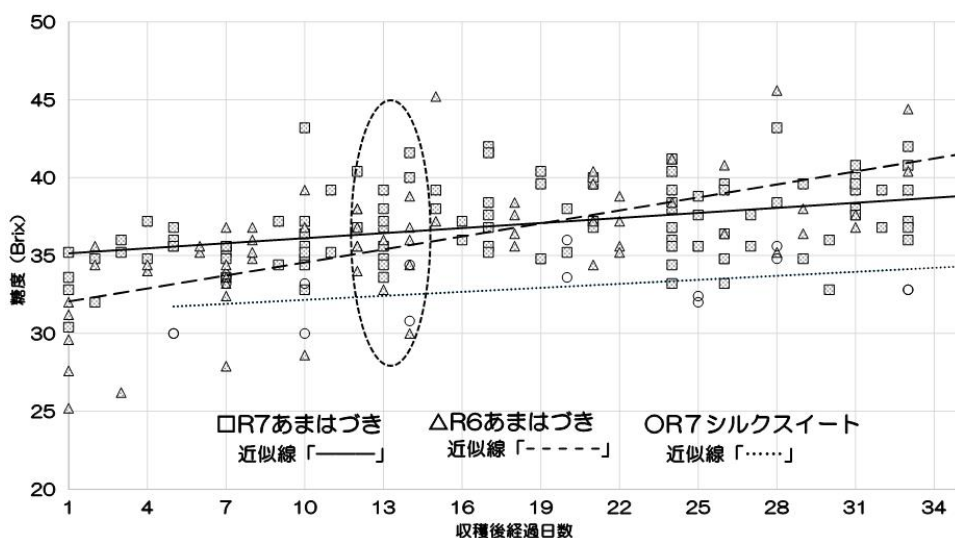


図 1 ふかし芋にした場合の収穫後の糖度の推移 (Brix 値) (参考)

経過日数ごとに「あまはづき」を調理し、ふかし芋にした場合の Brix 値の推移を調査した (図)。

(2) 流通試験の結果、他のサツマイモと同様に 14℃以下の低温にさらされると腐敗率が高まることが判明した。また、収穫後 30 日程度からサツマイモの軟化が増加する傾向があり、収穫後 30 日程度での消費が一つの目安になると考えられる。

(3) 経過日数による Brix 値の変化では、収穫後 13 日目の時点で比較的高い 35%付近まで推移しており、他のサツマイモに比べて圧倒的に早く糖化することが判明した。

だいこんの湿害対策の検証

1 活動のねらい・目標

夏から秋にかけての大雨や長雨により、土壌が過湿になると、だいこんでは軟腐病やピシウム腐敗病、リゾクトニアによる亀裂褐変症などが発生しやすくなる。そこで、ほ場への水の流入を防ぎ、排水を促進する方法として「明渠」の効果を検討した。

また、銚子市内の一部地域では、周囲より低い位置にあり、粘土質土壌のほ場でトンネルだいこんを栽培すると、通路が踏み固められることで降雨時に水が溜まりやすくなり、大雨の際にはトンネル内にも水が浸入し、発芽不良や病害発生を助長することがある。そこで、トンネル春だいこんほ場の通路に、地下へ余分な水を逃がすための「縦穴暗渠」を設け、その効果を検証した。

2 活動の内容と成果

(1) 秋冬どりだいこん栽培における明渠の効果

ほ場面より高い道路に挟まれたほ場で、道路に面した2辺に明渠を掘削し、降雨後の水の流入状況を観察した。管理機等の出入口で、明渠を掘削していない場所では、まとまった降雨後に、だいこんの葉に土が付着していたが、明渠がある部分では葉への土の付着がほぼ見られなかった。このことから、明渠によってほ場への水の流入が抑えられたと考えられる。周囲より低い位置にあるほ場では、すでに明渠を設けて栽培している生産者が多いが、改めて明渠の効果を確認できた。ただし、本年は秋の降水量がそれほど多くなく、明渠の有無によるだいこんの生育や病害発生の違いは見られなかった。

(2) トンネル春だいこん栽培での縦穴暗渠の効果

トンネル春だいこんほ場の通路に、深さ約70cm、直径約4.5cmの縦穴を掘削し、籾殻を詰めた縦穴暗渠を設置し、その周囲の排水性の改善を観察した。通路幅が異なるため正確な比較ではないが、まとまった降雨後には縦穴暗渠の周囲でぬかるみが少ない傾向が見られた(写真)。しかし、縦穴の掘削には時間と手間がかかるため、穴の数をなるべく少なくしても効果的な方法や、踏み固められた土壌表面をほぐすだけでも効果があるかなど、今後さらに検討が必要である。



写真 トンネル春だいこん通路に縦穴暗渠を設けた効果(矢印が縦穴暗渠の位置)

(撮影日: 令和7年12月26日 24~25日合計降水量19.2mm)

施設野菜の高温対策

－ 県単事業も活用した事例紹介 －

1 活動のねらい・目標

近年、夏期の猛暑による農作物への影響が顕著である。特に施設野菜では、対策を講じない場合、ハウス内温度が45℃以上となり、収量・品質が著しく低下する。この傾向は全国的に見られ、青果物の流通量が減少し、市場単価は上昇する傾向にある。したがって、高温対策技術を確立し、安定した収量・品質を得ることができれば、市場で有利となり、生産者の所得向上につながる。

本県では、これら高温対策技術の導入を促進するため、令和7年度から「ちばの園芸高温対策緊急支援事業」を開始した。本事業の活用も含め、キュウリ・ミニトマト・大玉トマトを中心とした施設野菜の高温対策技術の確立を図っている。

2 活動の内容と成果

「ちばの園芸高温対策緊急支援事業」では、海匝管内で当初募集76件、追加募集36件の申請があった。本事業の活用も含め、現場での高温対策事例を以下に紹介する。

(1) 外部遮光ネット・遮光カーテン・遮光剤（塗布剤）

外部遮光ネットは白色（シルバー）系と黒色系の資材に分かれる。同じ遮光率の資材であれば、ハウス内温度に大きな差はないが、キュウリでは黒色系資材だと生育初期の徒長が目立ち、収穫期の花飛びも多くなるという意見があった。一方、白色系は徒長が抑えられるものの、作業者の体感として暑く感じる事例があった。遮光カーテンも同様の傾向が見られた。

遮光剤（塗布剤）は様々な資材が使用されたが、「商品名：レディソル」は耐雨性に優れているという意見が多く、3～5月頃の遮光には「商品名：レディヒート」が有効と考えられる。

(2) 外気導入

ダクトファン（商品名：アウトサイダー、プッシュエア等）や暖房機（写真1）を利用した外気導入が行われた。どちらの方法も未使用時と比較してハウス内温度が1～2℃低下した。また、炭酸ガスの取り入れ効果もあり、未使用時は換気全開でも日中の炭酸ガス濃度が300ppmを下回ることがあるが、外気導入時は外気並みの380ppm程度を維持できた。

ダクトファンに比べて暖房機の方が出力が強く、効果が安定する印象があった。ダクトが作業の妨げになるため、吊り上げて群落内を通す事例もあった。暖房機を格納するコリドー施工も事業活用が見られた。ダクトファンは施工不要で手軽に導入できる点がメリットである。

(3) 自動かん水

日射比例による自動かん水システムの導入事例があった。特にキュウリでは収穫盛期になると管理作業が忙しく、かん水が不足しがちになるため、自動かん水は有効であった。ただし、旭市内は地下水の水質が悪く、塩基類や鉄分が多いため、通常の肥料に加えて pH ダウン剤などが必要となり、鉄分やカルシウム分によるチューブ詰まりが多く、毎年交換する事例が多いのが難点である。

(4) 簡易ミスト装置 (写真2)

細霧冷房装置ではなく、かん水チューブ (商品名: ミストエース 20) を使用した簡易的な装置を、1戸が事業活用により導入し、ミニトマト栽培に利用した。日中1時間に1回 (1回あたり3分間) 使用し、外気と比較して最大5℃程度温度が下がり、体感でも涼しく感じた。一方、ミスト使用後は日中換気全開でも湿度が85%程度まで上昇し、葉の濡れも目立った。

着果は良好であったが、高湿度により週1回薬剤散布していたにもかかわらず斑点病が多発した。昇温防止効果は高いものの、病害防除が課題である。

(5) 紙マルチ・モミガラマルチ

畑用紙マルチの導入事例が増加した。白黒マルチと比較して地温は1～2℃低く、表面温度は最大3℃低下した。マルチ下のかん水チューブの表面温度上昇も防ぐ効果が見られた。紙マルチのデメリットとして、再利用できない点と、冬期は地温を下げってしまうため越冬長期どりミニトマトの作型には不向きである。モミガラマルチは地温上昇を抑え、通気性があるため蒸れによる立枯病などの発生予防にも効果があり、数件の導入事例がある。

(6) まとめ

現状の高温対策では、遮光+外気導入+自動かん水+紙 (またはモミガラ) マルチの組み合わせが最大限に近いが、これでも猛暑の影響を完全に緩和しきれていない。今後も関係機関やメーカー等と連携し、さらなる研究を進めていく。



写真1 暖房機による外気導入



写真2 簡易ミスト装置

大玉トマトの高温対策

- 品質の向上、省力化を目指して -

1 活動のねらい・目標

銚子では抑制トマトの栽培が盛んに行われているが、近年は高温による品質低下や、微小害虫によるウイルス病多発により、非常に厳しい栽培環境が続いている。そこで、自動かん水装置の導入による真夏のハウス内の環境変化、並びに高通気性防虫ネットを用いた場合の気温の変化とコナジラミ類・アザミウマ類の発生状況について調査を行った。

2 活動の内容と成果

(1) タイマー式自動かん水装置による導入効果

令和6年度に導入したほ場と未導入ほ場を比較調査した。図1、2より、導入したハウスでは温度が約3℃低下し、湿度も5～10%上昇していた。

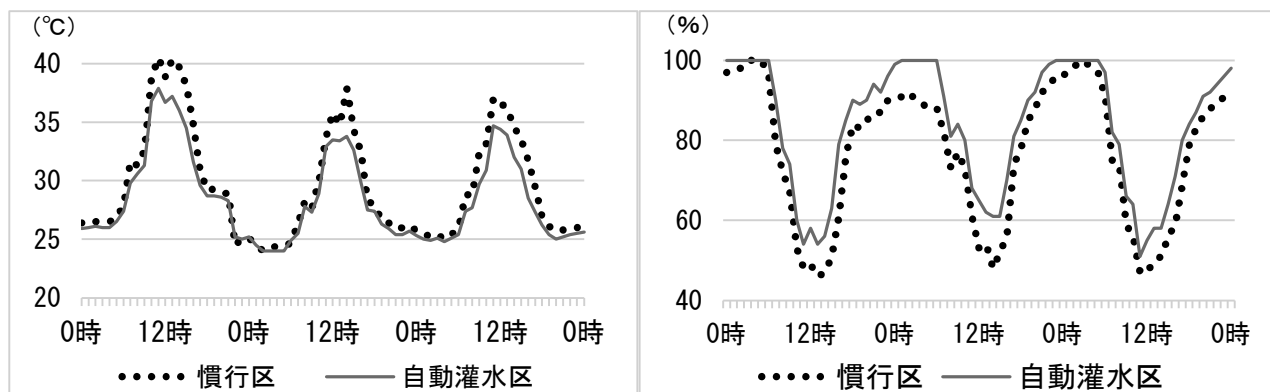


図1 温度の推移（令和6年8月19日～21日） 図2 湿度の推移（令和6年8月19日～21日）

※参考 アメダス（銚子市）令和6年8月19日「晴」最高気温32.7℃ 最低気温25.4℃ 平均湿度88% 最低湿度70%
令和6年8月20日「くもり」最高気温31.6℃ 最低気温24.9℃ 平均湿度84% 最低湿度66%
令和6年8月21日「くもり」最高気温29.8℃ 最低気温25.9℃ 平均湿度85% 最低湿度75%

また、土壌水分計を設置し、土壌水分量の変化も調査した。pF値が大きいほど乾燥、小さいほど湿潤を示している。トマトの栽培適正值は1.7～2.0程度であり、自動かん水導入ほ場では図3のとおり適正值に近づけることができた。

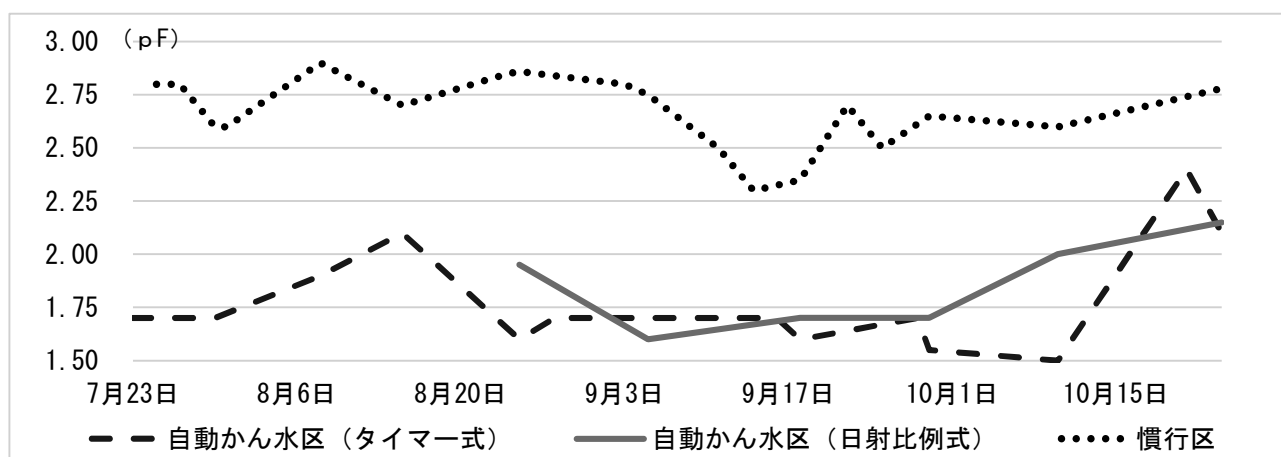


図3 土壌水分量の推移

(2) 高通気性防虫ネットによる導入効果

トマトでは病害虫対策として防虫ネットの使用が推奨されている。0.4 mm目合いのネットを展張することでウイルス病を媒介するコナジラミ数を低密度に抑えられるが、ハウス内温度が上昇することが課題である。そこで、0.4 mm目合いのネットと同等のコナジラミ防除効果を持ちながら、高い通気性が期待できる「商品名：通るクン」に注目し調査を行った。ハウス規模を揃え、慣行区（サイド1 mm目合いネット、谷：4 mm目合いネット）と試験区（全面：通るクン）を設置し比較した。

図4より、各区のハウス内最高温度を比較すると、試験区では2～3℃程度の温度上昇が確認された。

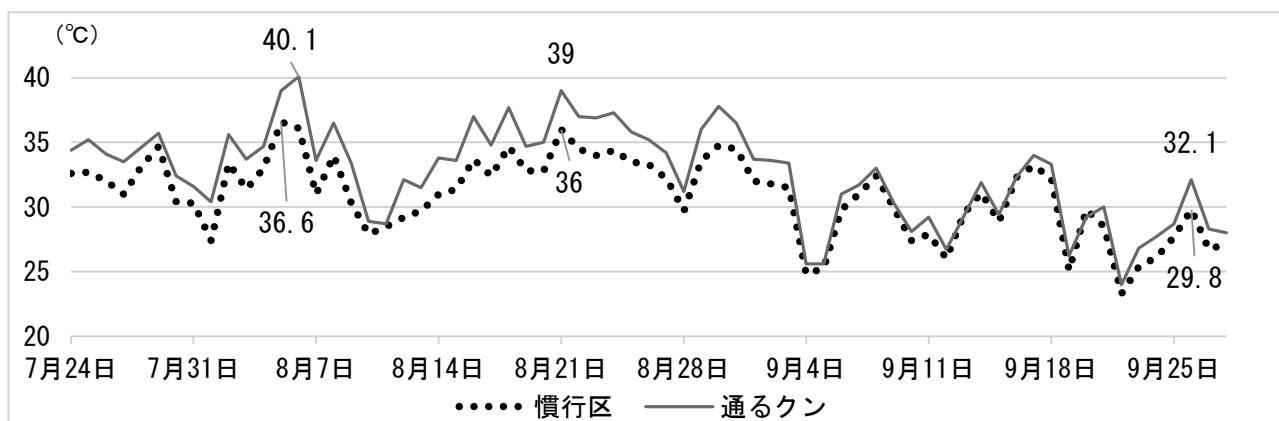


図4 令和7年のハウス内温度変化（午前2時及び午後2時の定時測定）の推移

捕虫調査の結果、黄化えそ病を媒介するアザミウマ類数は、図5より各区とも低密度で推移した。図6より試験区（通るクン）では黄化葉巻病を媒介するコナジラミ類数の密度低減効果は大きく、慣行区では薬剤散布後に一時的に密度が高くなるものの、短期間で密度が高くなるのが読み取れる。近年問題となっている黄化葉巻病対策に大きく寄与できる結果が得られた。

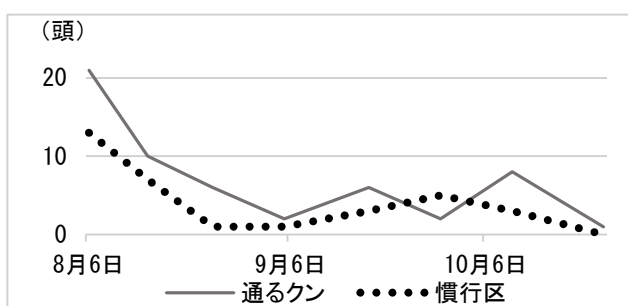


図5 アザミウマ類数の推移（10日に1回）

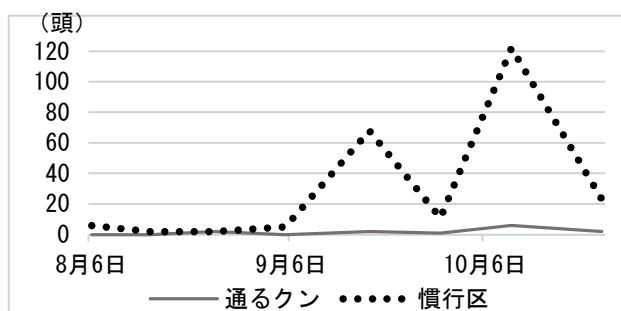


図6 コナジラミ類数の推移（10日に1回）

3 今後の展開方法

病害虫対策を実施すると防虫ネットの目合いが細くなり、必然的にハウス内温度が上昇する。そのため、自動かん水装置や遮光資材等による高温対策と組み合わせが必須と考える。今後も継続して調査を行い、産地の維持・発展に向けて寄与したい。

畜産経営における暑熱対策

－ ホルスタインの暑さ対策 －

1 活動のねらい・目標

近年、地球温暖化の影響により、令和5年、令和6年、令和7年と記録的な猛暑が続いている。乳牛の代表であるホルスタイン種は、エサの消化・吸収時に熱を発生させるため寒さには強い一方、暑さには弱く、日本の高温多湿の夏は過酷なストレス環境となり、食欲の低下や乳量の減少が生じている。各農場では、夏場の暑熱対策としてTHI（湿温度指数）の活用、牛舎の換気や送風機の利用、細霧装置による牛体散水、牛舎屋根への断熱剤塗布、散水など、様々な方法で暑さを緩和する対策を講じている。本稿では、普及が立ち会い実践した事例を紹介する。

2 活動の内容と成果

(1) ホルスタインの毛刈り

「現代農業（農文協）」平成12年8月号の記事では、全身を1mmに毛刈りすることで1日あたり2.4kgの乳量増加が見られ、扇風機や細霧装置と組み合わせるとより効果的であるとされている。これを参考に、7月上旬に分娩直前の個体を除いた搾乳牛全頭を牛用大型バリカンで毛刈りをした。千葉県畜産総合研究センターから借用した2台のバリカンを用い、1頭あたり約15分で毛刈りを実施できた。

令和6年と令和7年の牛群検定成績表から乳量を比較した結果、毛刈りを行った令和7年7月・8月は令和6年の同月と比べて多少の乳量の落ち込みが見られ、9月はさらに乳量が減少していた。外気温については令和7年は令和6年に比べて8月の猛暑日が1.5倍多く、9月も前年より猛暑日が多かったため、毛刈りの効果以上に暑熱ストレスの影響を強く受け、乳量が下がったと考えられる。

(2) 屋根の遮熱塗料の塗布の効果検証

夏場の暑熱対策として遮熱塗料を塗布することで、屋根温度に差が出るか検証した。この牧場の畜舎の屋根について、「鉄板二重の部分」「屋根の一部に太陽光パネルが設置された部分」「今回遮熱塗料を塗布した部分」があり、それぞれの部分の温度を比較した。

サーモカメラで下から測定した結果、「鉄板二重の屋根 42.4℃（写真1）」と比較し「太陽光パネル設置部分 37.6℃（写真2）」は約5℃低い結果となり、「遮熱塗料を塗布した部分 38.5℃（写真3）」でも約4℃低下しており効果があったと考える。また、参考に「スレート屋根」を測定したところ52.1℃（写真4）となり、かなり蓄熱されていた。日当たりや屋根の向きや傾き等の影響も考えられるが、遮熱塗料の塗布や太陽光パネルの設置により、屋根裏面からの放射熱を下げることで、畜舎内の温度上昇もある程度抑えられることができると考える。

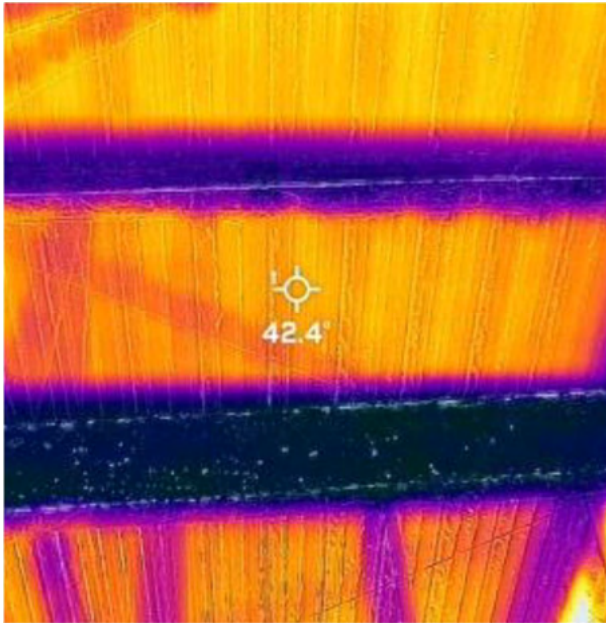


写真1 鉄板二重 42.4°C



写真2 太陽光パネル下 37.6°C

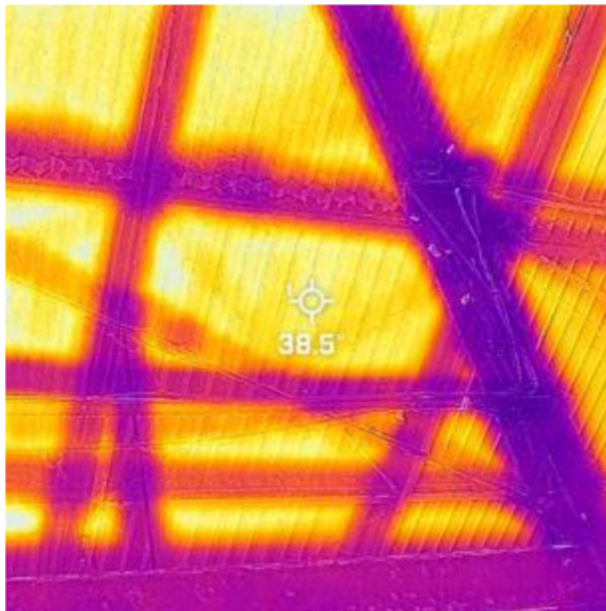


写真3 遮熱塗料 38.5°C

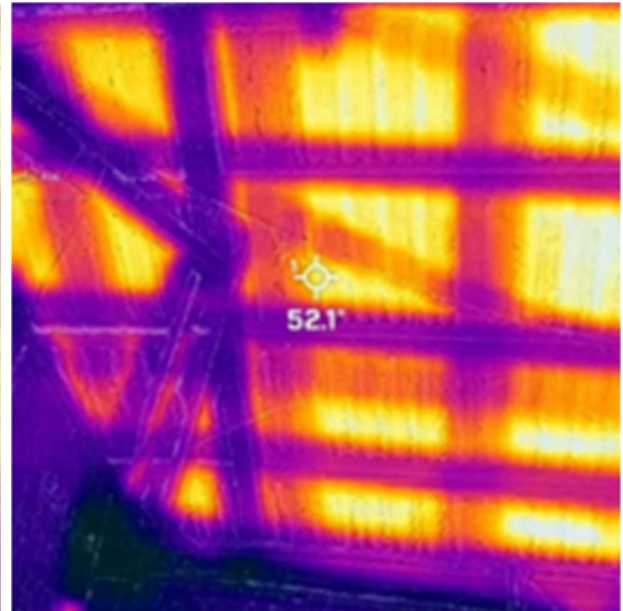


写真4 スレート 52.1°C

(3) 換気扇や扇風機の調整

暑熱対策として、換気扇や扇風機を活用し、牛体の胸元に風速2 m/秒で風を当てることで体感温が約8°C低下するため、牛床での風速確保が重要である。風速計を用いて牛舎内の風速を計測したところ、風が一方通行になっていない場所や、牛舎内の風下で風速が不足している場所があり、風が通りにくい環境となっていた。

また、空気の滞留を見るため、牛舎内のアンモニアを測定したところ0~2 mg/Lの間で空気中濃度に問題は無かったが、換気扇や扇風機を改善することで風の方向や風量・風速の確保ができ、アンモニア濃度もさらに下げられる可能性があると考えられる。

太陽熱土壤消毒と薬剤を組み合わせたセンチュウ防除

- 収穫可能期間延長を目指して -

1 活動のねらい・目標

キュウリやミニトマトの越冬作において、収量の安定・向上には作終盤まで健全な生育を維持することが重要である。しかし、サツマイモネコブセンチュウによる被害により、作中盤から終盤にかけて収量が大きく減少することがある。土壤消毒剤や抵抗性品種の導入も行うが、薬剤抵抗性の発達や品種の抵抗性を打破するセンチュウ個体の増加により、防除が十分に機能しないほ場も見受けられる。

そこで、越冬作終了後に実施できる対策として太陽熱を利用した土壤消毒と薬剤防除の組み合わせによるセンチュウ密度抑制効果の検討結果を情報提供する。

2 活動の内容と成果

(1) センチュウ密度抑制効果

「太陽熱土壤消毒」はハウスの畝ごと順番にかん水した後、全面をビニールで被覆し、期間は7月24日～8月16日の24日間とした。次に耕耘整地を行った上でD-Dをかん中、被覆を14日間行った。センチュウ数はハウス内5か所から土壤を採取し(図1)、「越冬作終了後」「太陽熱土壤消毒終了直前」「D-Dによる土壤消毒後」の計3回計数した。ハウス内の温度は加温機等の設備に負担がかからないよう50～60℃程度で管理し、地温は平均40℃程度となった。

被覆前のセンチュウ数は採土20gあたり20～100頭と非常に高密度であったが、太陽熱消毒後は0.5～10.5頭まで減少した。更に「D-D」による土壤消毒を実施することで、0～1頭まで密度を抑制できた(表1)。

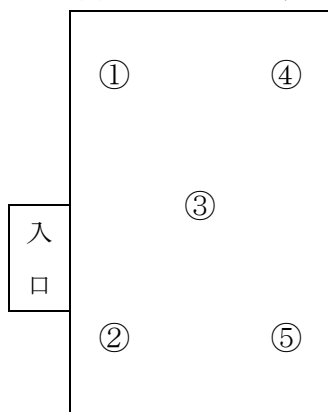


図1 土壤の採取位置

表1 採土20gあたりのセンチュウ個体数(頭)

採取位置	越冬作終了後	太陽熱土壤消毒	D-Dによる
	7月24日	終了直前 8月12日	土壤消毒後 9月16日
①	20.5	10.5	0.5
②	45.0	10.5	0
③	95.5	6.0	1.0
④	92.5	1.5	0
⑤	59.0	0.5	0

(2) 今後の展開方法

ハウス内の加温機等の資材に負担をかけない温度帯での太陽熱消毒でも、センチュウ密度の抑制効果が認められた。今後は、センチュウによる被害が出始める3月以降のセンチュウ数および被害程度を調査し、最終的な防除効果について検討していく。

千葉県鉢花生産者連絡協議会の取組について

- 1年間の取組について -

1 活動のねらい・目標

千葉県鉢花生産者連絡協議会（以下、「鉢花協議会」）は、千葉県花き園芸組合連合会の構成組織の1つであり、千葉県全域で56名（令和7年現在）の鉢物・苗物生産者が所属する花き生産者団体である。この団体では、技術向上、情報交換、販路拡大、後継者育成など、様々な取組を通じて、今後の花き園芸の発展につながる活動を行っている。令和6年度より海匠農業事務所で事務局を務め、様々な活動支援を行った。

2 活動の内容と成果

(1) 活動の概要

鉢花協議会では、三役（会長、副会長、会計）と支部長が中心となり、自主的な活動を行い、事務局がそれを支援している。三役会議や支部長会議を定期的に行い、活動内容の協議、研修会の開催、総会に向けての準備を行っている。また、千葉県フラワーフェスティバルと関東東海花の展示会では、多くの花を出品している。当日は、運営補助などで参加し、会場を盛り上げている。事務局では、会議や研修会の通知発送や出席者の取りまとめ、当日資料の作成、イベント等での出品の取りまとめ等の支援を行っている。

(2) 研修会について

6月中旬には鉢物・苗物生産者経営改善研修会を、印旛農業事務所と合同共催し、鉢花協議会からも多く参加した。

研修会では、株式会社ゲブラナガトヨ代表取締役社長である荒井氏を講師として、経営分析に基づく経営計画の立案の重要性や原価計算の手法についての講演とほ場視察があり、荒井氏から従業員への作業指示伝達の工夫や生産効率向上を意識した取組についての説明があった。

(3) 通常総会及び記念講演

令和8年3月2日には通常総会を開催し、生産者38名、関係機関、企業含め計85名が参加した。総会終了後には、関係機関からの情報提供、資材メーカー16社による資材紹介やブース展示、(株)フラワーオークションジャパン福永氏による「花きの需要動向に合わせた販売について」の記念講演（写真）、情報交換会などが行われた。



(写真) 通常総会後の記念講演

II 試験報告

海匠地域に適したより簡便なプール育苗の方法の検討

1 背景及び目的

プール育苗は苗箱を水に沈めるため寒さに強く、東北・北越地域のような寒冷地で普及率が高い技術である。千葉県内では普及率が低いものの、かん水作業の大幅な省力化や病害発生の少なさから、大規模水稻農家や園芸・水稻の複合経営にも受け入れられる技術と考えられる。海匠地域では水稻の育苗ハウスを野菜生産に利用する経営体が多く、野菜収穫終了後にプール育苗ができるか検討した。

2 調査研究内容

- (1) 実施期間 令和7年2月～令和7年5月
- (2) 調査研究地域 旭市高生
- (3) 調査研究方法

野菜生産終了後にプール育苗床の整地作業と、慣行の手かん水で行う育苗でかかる整地作業、かん水作業及び緑化期間の換気作業について、作業時間を比較した。

ア 展示ほ設置農家の育苗ハウスの利用方法と資材検討

野菜生産を行っているビニールハウスのうち、水稻育苗を行っている幅 5.4m×奥行 36mのパイプハウスを選定した。このハウスは10月から翌年2月まで、サニータスの平畝マルチ栽培を3列で行っており（写真1）、プール育苗床の設置は、均平作業を3月から始め、4月上旬の水稻は種前までの約1か月間で完成させる計画とした（写真2）。

プール育苗床は1.8m×30mとし、左右に1列ずつ設置し、中央部分は通路とした。初めての取り組みのため、プール育苗床底面の防水対策として、3m×30mの「プール育苗専用シート（30,459円）」を2面分用意し、底面2面分の土を均平化することとした。水を貯めるには止水枠が必要であり、設置の簡便性と時間短縮を考え、水を入れた「温水チューブ[※]（0.2mm×150mm×50m、5,744円）」を4本使用することとした。プール育苗床に588枚（3枚×98列分×2面）の苗箱を置くことを想定し、慣行の手かん水で行う育苗について同条件で作業時間を計算することとした。

※「温水チューブ」：山間部では用水が冷たく、そのまま水田に入水すると稲が生育停滞するため、黒色の「温水チューブ」に用水を通し、太陽光で温めてから使用する。最近はプール育苗の水どめとして使用例がある。

イ 均平作業（水平出し、土の均平）

水平出しはオートレベルと球面脚頭式三脚を組み合わせ、レーザー光を使用することとした。プール育苗床の底面水平の目安は、四隅に角杭を打ち、水系を引き（写真3）、水系の5 cm 下を底面の高さとし、端を5 cm にカットした貫板（写真4）を水系に合わせ土を引くこととした。土の移動はスコップ、トンボ及びクワ等の土工具、土の運搬に1 輪車と手みを用い、底面の鎮圧も足で踏み込むこととした。



写真1 前作サニーレタス



写真2 サニーレタスの片付けと土移動



写真3 水系による水平出し



写真4 水系に沿って貫板を引き土の均平をとる

ウ は種作業から移植までのスケジュール

(ア) 品種	リーフスター（イネ WCS 用）	
(イ) 出芽方法	無加温出芽	
(ウ) 作業日時・期間	は種	4月9日（出芽期間6日）
	緑化開始	4月15日（緑化期間1日）
	入水・換気開始	4月16日（硬化期間16日）
	移植	5月3日（プール育苗の落水は5月1日）
(4) 調査協力依頼先	旭市水稻生産者	1戸

3 調査結果及び考察

(1) プール育苗床の設置に係る作業時間の算出

設置作業は他の作業の合間に行い、1日あたり人手は2～3人、時間は半日から1日で行った。合計時間は32時間、1人作業換算で4日間となった。また、休憩時間を除いた実働時間は25.6時間と考える（表1）。

表1 整地作業の日程とかがった時間（単位：時間）

作業日時	時間	人数	作業時間	実働時間	作業内容
3月4日	2	2.5	5	4.0	プール育苗床（右）：水平出し（水糸張り）、土移動
3月17日	2	3	6	4.8	プール育苗床（右）：貫板を使用し水平整地 プール育苗床（左）：土移動
3月18日	3	3	9	7.2	プール育苗床（左）：土移動
3月19日	2	1	2	1.6	プール育苗床（左）：水平出し（水糸張り）、土移動
3月24日	2	2	4	3.2	プール育苗床（左）：土移動
3月24日	2	1	2	1.6	プール育苗床（左）：貫板を使用し水平整地
3月25日	2	2	4	3.2	プール育苗床（左）：貫板を使用し水平整地 プール育苗床（左右）：温水チューブとプール育苗専用シート設置
計			32.0	25.6	

※実働時間＝作業時間×0.8（作業時間中に休憩時間が含まれるため）

(2) 慣行育苗の作業時間との比較

プール育苗と慣行育苗を同じスケジュールで実施した場合、比較できる作業について『整地』『育苗管理（かん水・換気作業（硬化期））』の時間を588箱（3枚×98列分×2面）の育苗床に換算し算出した（表2-1）。

『整地』についてはプール育苗が21.6時間増加、『育苗管理（かん水・換気（硬化期））』についてはプール育苗が12.3時間短縮となり、作業時間合計ではプール育苗は慣行育苗と比べ9.3時間増加した。

ただし、育苗にかかる時間を時系列で考えると、プール育苗では3月に作業を前倒しで行うことで、4月中下旬の管理作業の時間を短縮し、作業時間の分散が可能になると考えられる（表2-2）。

表2-1 ハウス一棟（588箱）あたりの作業時間の比較（時間集計）

育苗方法	整地	育苗管理		作業時間合計
		かん水※1	換気（硬化期）※2	
プール育苗	25.6時間	0.2時間	0時間	25.8時間
慣行育苗	4.0時間	9.8時間	2.7時間	16.5時間

※1 1シーズン15回、かん水1回あたり4秒/箱

※2 硬化期16日間、換気作業に1日10分

「プール」の換気「0時間」は硬化期にハウスを全開で管理したため

表2-2 ハウス一棟（588箱）あたりの作業時間の比較（時系列）

	3月 (31日間)	4月上旬 (10日間)	4月中下旬 (20日間)
プール育苗	整地 25.6時間	種子予措・は種 (略)	かん水・換気 0.2時間
慣行育苗	〃 4.0時間	〃	〃 12.5時間
参考) 本ぼ作業	耕起	畔塗	荒代かき、代かき

(3) 作業内容・資材の検討

今回ハウス1棟のプール育苗床整地に要した時間は25.6時間となり、慣行育苗より大幅に増える結果となった。整地作業の時間短縮のため、作業工程ごとに検討した。

ア 均平方法

ハウス床面（5.4m×36m）のうち、プール育苗床（1.8m×30m）2面のみを水平に整地した。ハウス全体の床面は入口が高く奥が低い長辺状の傾斜があり、土の移動量が多くなった。レーザー光を利用したオートレベルで水平を出せたが、足で踏み固めながら高さを調整するなど、均平を正確に取ることに時間を要した。貫板で均平を見る工程は精度を求めるには必要だったが、苗箱の縦横30cm×60cmより大きな窪みや山がなければ、プール育苗床の湛水時に影響がないため、均平の精度を落としても良かったとも考えられる。なお、プール外周部分と通路部分について均平作業を行わなかったため、後で別の問題が発生した。

イ プール育苗専用シートについて

専用品であり、1シーズン使用して穴あき等による水漏れは無かった。保管状態が良ければ数シーズンは使用できると考えられる。また、確実性を考え今回は使用しなかったが、施設野菜で使用したビニールハウスの被覆をプール育苗床で再利用する方法もある。

ウ 止水枠として使用した温水チューブについて

プール育苗専用シート展張時にプールの縁となる部分に、水を入れない状態で温水チューブを設置した（写真5）。苗の緑化終了後、プールを湛水する前に、温水チューブに水を入れ水枕をつくり止水枠にしようとしたが、通路及びハウス壁側は水平に整地しておらず、低い方へころがり止水枠として利用できなかった（写真6）。そのため、急遽、角材や足場パイプ等を使用し止水枠とした。

止水枠として温水チューブを使用する場合、育苗床の整地だけでなく周囲の均平

が必要となり、作業時間が増える要因になった。育苗床の整地条件に関わらず、止水枠が固定できるよう材料の選定を行う必要があると考えられる。



写真5 (無加温出芽中)
プール育苗専用シートの下に温水チューブを設置



写真6 温水チューブ(黒色)がこぼれた状態で
角材や足場パイプ等で止水した。

(4) まとめ

育苗以外に施設野菜を栽培するハウスの場合、野菜の畝崩し等で土の移動があるため、毎年均平が必要になる可能性がある。今回の「プール育苗専用シート」と「温水チューブ」を使用するプール育苗は、全体の労働時間が慣行育苗より増える結果となった。ただし、3月中にプール育苗設置作業に時間を費やすことで、4月中下旬の管理作業について、かん水作業と換気作業を軽減できた利点が生産者に評価され、令和8年作も今回のハウスで改良を加えプール育苗に取り組む予定である。

なお、改善案としては、均平作業と整地作業に時間と労力を要するが、ハウス全面で均平を取ることとし、止水枠は野地板等を用いた枠板とし(写真7)、床面の被覆を農ビ(0.1mm)にした場合はハウスパッカー(写真8)で枠板に固定する方法が考えられる。



写真7 (改善案)
野地板による止水枠



写真8 (改善案)
ハウスパッカーによる農ビの固定

Ⅲ 令和7年度の主な普及活動

年	月	日	内 容
7	4	1	飯岡野菜部会 春キャベツ査定会 (JA ちばみどり飯岡支店)
		7	第1回新規ねぎ栽培者向け講習会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		7	そうさの米研究会座談会 (栄営農組合)
		8	海上採種組合水稻育苗巡回 (JA ちばみどり営農センター海上)
		8	とうもろこし栽培講習会 (JA ちばみどり本店)
		11	そうさ施設園芸部ミニトマト部会中間検討会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		15	キャベツ査定会議 (JA ちばみどり海上中央支店)
		16	匝瑳市飼料用米推進協議会利用者部会 (匝瑳市野栄総合支所)
		18	令和7年産WCS用稲第1回会議 (春海・椿海・豊和支区事務所)
		18	匝瑳市飼料用米推進協議会生産者部会 (春海・椿海・豊和支区事務所)
		21	そうさ園芸部夜間市場流通調査 (東京都豊洲市場)
		22	第2回新規ねぎ栽培者向け講習会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		23	JA ちばみどりミニトマト研究会・旭ミニトマト部会栽培講習会 (JA ちばみどり本店)
		28	夏秋胡瓜・夏秋トマト栽培講習会 (JA ちばみどり本店)
5	3		匝瑳市植木まつり・共進会 (匝瑳市生涯学習センター)
		9	銚子施設園芸組合 抑制トマト栽培講習会 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		12	旭露地野菜部会 春菊・パセリ・いんげん・ししとう・青唐辛子査定会 (JA ちばみどり矢指資材倉庫)
		12	そうさ施設園芸部春トマト販売会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		13	そうさ園芸部 夏ネギ、そら豆査定会 (横芝光町文化会館)
		13	経営体育成セミナー開講式 (いいおかユートピアセンター)
		16	銚子施設園芸組合 越冬作・春作トマト生産者大会 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		16	海上野菜組合パセリ・春菊査定会議 (JA ちばみどり海上中央支店)
		16	そうさ施設園芸部 青ピーマン販売会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		26	ニラ栽培講習会 (JA ちばみどり営農センター干潟)
		28	ちばガーベラ研究会 令和7年度第1回ほ場巡回 (旭市内)
		29	第3回新規ねぎ栽培者向け講習会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)

年	月	日	内 容
7	5	30	そうさ施設園芸部 青ピーマン現地検討会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
	6	3	そうさ園芸部 とうもろこし目揃会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		6	銚子西瓜組合 目揃・現地検討会 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		12	干潟園芸組合 大和芋栽培講習会 (JA ちばみどり営農センター干潟)
		12	そうさ施設園芸部いちご部会 出荷反省会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		13	銚子メロン生産者大会 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		13	飯岡メロン部会査定会 (JA ちばみどり飯岡支店)
		13	銚子市露地野菜若手生産者交流会第1回 (銚子市勤労コミュニティセンター)
		19	経営体育成セミナー基本研修「地域農業の概要・災害対策」 (東総野菜研究室)
		19	経営体育成セミナー総合研修「経営計画の重要性について学ぶ」 (海匠合同庁舎)
		19	旭地区とうもろこし査定会 (JA ちばみどり本店)
		26	そうさの米研究会現地検討会 (匝瑳市野栄総合支所)
		26	経営体育成セミナー専門研修「農薬使用・病害虫(応用)」(海匠合同庁舎)
		26	夏秋胡瓜目揃会・冬春胡瓜出荷反省会 (JA ちばみどり本店)
		26	銚子野菜連合会 キャベツ・大根販売反省検討会議 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		27	そうさ施設園芸部きゅうり部会 出荷反省会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
	7	1	海匠地域農山漁村男女共同参画推進会議 (いいおかユートピアセンター)
		2	そうさ自主開発米研究会 現地検討会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		9	旭市肉豚共進会 (千葉県食肉公社)
		9	銚子施設園芸組合 越冬トマト栽培講習会 (JA ちばみどり飯岡支店)
		10	銚子西瓜販売査定会 (犬吠埼ホテル)
		11	旭市果樹園芸組合「なし」 出荷前相互視察・出荷前打合せ会 (JA ちばみどり溜下倉庫)
		11	そうさ施設園芸部ミニトマト部会出荷反省会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		11	旭市飼料用米利用者協議会 (旭市内)

年	月	日	内 容
7	7	17	アグリレディース海匠研修会（いいおかユートピアセンター）
		17	銚子露地野菜若手生産者交流会第2回（JA ちばみどり営農センター銚子）
		18	経営体育成セミナー基本研修「農業機械研修」 （千葉県立農業大学校機械化研修科）
		18	水稻採種ほ1回目審査（旭市）
		18	そうさ園芸部東陽支部 秋冬・春物野菜反省会（山武市）
		22	千葉県借当川沿岸土地改良区集落営農視察研修会（匝瑳市内）
		22	旭夏秋トマト・ミニトマト査定会及び秋冬ミニトマト出荷反省会 （JA ちばみどり本店）
		23	海匠地区指導農業会現地検討会（旭市内）
		23	そうさ園芸部ねぎ栽培講習会（横芝光町町民会館）
		23	匝瑳市飼料用米推進協議会生産者部会（春海・椿海・豊和支区事務所）
		24	そうさ施設園芸部大玉トマト部会出荷反省会 （JA ちばみどり営農センターそうさ）
		25	海匠農業BIG交流会（犬吠埼ホテル）
		31	水稻採種ほ2回目審査（旭市内）
8	1	1	冬春胡瓜栽培講習会（JA ちばみどり本店）
		1	そうさ園芸部八日市場支部「土作り講習会」「秋冬・春物出荷反省会」 （JA ちばみどり営農センターそうさ）
		4	海上野菜組合 土壌診断報告会（JA ちばみどり海上支店）
		4	そうさ施設園芸部 赤ピーマン出荷販売会議 （JA ちばみどり営農センターそうさ）
		8	干潟園芸組合胡瓜部会 胡瓜栽培講習会（JA ちばみどり営農センター干潟）
		8	経営体育成セミナー総合研修「経営分析とライフプランを見据えた収支分岐点分析」（海匠合同庁舎）
		8	銚子市農業労働力確保研修会（JA ちばみどり営農センター銚子）
		18	そうさ施設園芸部きゅうり栽培講習会 （JA ちばみどり営農センターそうさ）
		21	第4回新規ねぎ栽培者向け講習会（JA ちばみどり営農センターそうさ）
		22	豊里地区「土壌改良研修会」（JA ちばみどり豊里出張所）
		25	あまはづき査定会（JA ちばみどり営農センター海上）
		27	めぐり女子いろCOCO 銚子視察研修会（茨城県常総市及び阿見町）
		29	「銚子メロン」生産・販売反省検討会（JA ちばみどり営農センター銚子）

年	月	日	内 容
7	9	4	農業経営体育成セミナー専門研修「土づくり」(海匠合同庁舎)
		9	銚子施設園芸組合 越冬作・春作トマト反省会及び抑制作トマト生産者大会 (犬吠埼ホテル)
		10	経営体育成セミナー基本研修「農薬使用・セミナー生相互訪問」 (海匠合同庁舎他)
		16	干潟園芸組合蔬菜部会 菜花栽培講習会 (JA ちばみどり営農センター干潟)
		17	メロン農業女子スキルアップセミナー (JA ちばみどり飯岡支店)
		18	銚子市露地野菜若手生産者交流会第3回 (市原市)
		18	海匠地域有害鳥獣対策講習会 (東総野菜研究室)
		19	銚子市農業女子経営スキルアップセミナー農業経営レベルアップ研修会 (銚子市勤労コミュニティセンター)
		26	銚子西瓜組合販売反省検討会 (犬吠埼ホテル)
		30	飯岡メロン部会 次年度検討会議 (JA ちばみどり飯岡支店)
10	1		「季楽里あさひ」販売力アップ研修会 (道の駅「季楽里あさひ」)
		2	若潮牛共励会 枝肉審査 (東京食肉市場)
		2	シクラメン部会第1回現地検討会 (山武農業事務所管内)
		6	そうさ施設園芸部 抑制トマト販売会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		6	海上野菜組合サツマイモ目揃会 (JA ちばみどり海上中央支店)
		7	飯岡いちご部会秋季販売会議 (JA ちばみどり飯岡支店)
		8	海上野菜組合 大根・キャベツ栽培勉強会 (JA ちばみどり海上中央支店)
		10	経営体育成セミナー合同研修「指導農業士に学ぶ」 (匝瑳市生涯学習センター)
		21	関東ブロック農業士等研究会 (千葉市中央区)
		22	
		24	そうさ施設園芸部ミニトマト販売会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		27	旭ミニトマト査定会 (JA ちばみどり本店)
		28	海上野菜組合キャベツ査定会議 (JA ちばみどり海上中央支店)
		31	海匠地域農業女子視察研修会 (袖ヶ浦市)
11	5		千葉県農業士・指導農業士第49回認証式典 (千葉市中央区)
		7	銚子市露地野菜若手生産者交流会第4回 (銚子市勤労コミュニティセンター)

年	月	日	内 容
7	11	7	共栄花き研究会（ホテルサンモール）
		7	旭果樹園芸組合農薬講習会（JA ちばみどり営農センター旭）
		10	指導農業士4郡研修会（サンライズ九十九里）
		10	酪農講習会（海匠合同庁舎）
		11	そうさ園芸部 秋冬・春ねぎ査定会・講習会（横芝光町文化会館）
		14	そうさ施設園芸部ピーマン部会作付け検討会 （JA ちばみどり営農センターそうさ）
		14	銚子ゆでピー生産組合販売反省検討会議（犬吠埼ホテル）
		18	海上野菜組合 大根査定会（JA ちばみどり海上中央支店）
		19	旭農業高等学校との連携による「視察研修会」（東金市・八街市）
		19	農業経営体育成セミナー基本研修「セミナー生相互訪問②」
		20	農業活性化フォーラム in 海匠（東総文化会館）
		20	海上野菜組合パセリ・春菊査定会（JA ちばみどり海上中央支店）
		20	飯岡野菜部会パセリ・春菊合同査定会（JA ちばみどり飯岡支店）
		21	冬春胡瓜標準品出荷査定会（JA ちばみどり本店）
		21	飯岡野菜部会 秋冬作きゃべつ・だいこん合同査定会 （JA ちばみどり飯岡支店）
		26	旭露地野菜部会 春菊・パセリ・ブロッコリー出荷査定会 （JA ちばみどり矢指資材倉庫）
		27	経営体育成セミナー専門研修「プロジェクト中間検討会・セミナー生相互 訪問」（海匠合同庁舎）
		28	旭苺部会 苺出荷標準品査定会（JA ちばみどり本店）
		28	そうさ施設園芸部きゅうり部会出荷査定会議 （JA ちばみどり営農センターそうさ）
12	5	5	「匠瑳の舞」栽培反省会（JA ちばみどり営農センターそうさ）
		5	飯岡野菜部会 結球・非結球レタス査定会（JA ちばみどり飯岡支店）
		5	ケブカトラカミキリ防除対策協議会（匠瑳市のさか図書館）
		5	AFC ほ場巡回・情報交換会（旭市内）
		8	令和7年産WCS用稲第2回会議（春海・椿海・豊和支区事務所）
		8	匠瑳市飼料用米推進協議会生産者部会（春海・椿海・豊和支区事務所）
		9	匠瑳市飼料用米推進協議会利用者部会（匠瑳市野栄総合支所）
		11	飯岡いちご部会査定会（JA ちばみどり飯岡支店）
		11	銚子市苺組合販売査定会（JA ちばみどり営農センター銚子）

年	月	日	内 容
7	12	12	経営体育成セミナー総合研修 「家族経営協定のすすめ」(海匠合同庁舎)
		12	そうさ施設園芸部いちご部会出荷査定会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		18	経営体育成セミナー専門研修「農業労働改善・経営」 (いいおかユートピアセンター)
		23	経営体育成セミナー基本研修「土壌肥料・相互訪問③」(東総野菜研究室他)
8	1	13	経営体育成セミナー総合研修勉強会「経営ビジョン作成に向けて」 (海匠合同庁舎)
		13	あまはづき出荷反省会 (JA ちばみどり営農センター海上)
		14	海匠地区指導農業士会会員交流会 (茨城県阿見町他)
		16	メロン栽培講習会 (JA ちばみどり飯岡支店)
		16	「海匠キュウリ農業女子ネットワーク」設立総会 (海匠合同庁舎)
		16	豊里でのこれからの農業経営を考える会 (JA ちばみどり豊里出張所)
		16	匠瑳市植木組合意見交換会 (匠瑳市内)
		29	経営体育成セミナー合同研修「緑肥の活用・農産物の販売流通」 (雪印種苗(株)千葉研究農場・イオンモール津田沼店)
		30	銚子露地野菜若手生産者交流会第5回 (東総野菜研究室)
	2	6	ちばガーベラ研究会市場視察研修会 (東京都足立区)
		9	銚子施設園芸組合トマト研究会 越冬作現地講習会 (銚子市内ほ場)
		17	水稻防除事業 (有人・無人ヘリコプター) 計画協議 (千葉県農業共済組合海匠支所)
		20	飯岡いちご部会中間検討会 (JA ちばみどり飯岡支店)
		20	そうさ施設園芸部きゅうり部会出荷中間検討会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		20	干潟園芸組合野菜部会白瓜栽培勉強会 (JA ちばみどり営農センター干潟)
		20	そうさ施設園芸部きゅうり部会出荷中間検討会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		24	銚子施設園芸組合 抑制作トマト出荷反省会 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		26	経営体育成セミナー意見発表・プロジェクト発表会 (海上公民館)
		27	アグリレディース海匠 10 周年記念事業講演会 (銚子市内)
		27	旬の味産直センター「夏ねぎ夏越の為の対策」講習会 (多古町)

年	月	日	内 容
8	2	27	そうさ施設園芸部ピーマン部会出荷反省会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
	3	2	旭いちご部会 苺目揃え会・中間検討会 (JA ちばみどり本店)
		3	旭市羽ばたくルーキー農業者激励会 (旭市役所)
		3	水田高収益作物栽培反省会 (借当川沿岸土地改良区事務所)
		5	経営体育成セミナー閉講式 (東総文化会館)
		6	匝瑳市ジャンボタニシ対策研修会 (匝瑳市野栄総合支所)
		6	銚子市苺組合目揃え会 (JA ちばみどり椎柴第二集出荷場)
		9	海匝農業士協会定期総会 (旭市内)
		10	飯岡野菜部会春だいこん・春きゃべつ合同査定会 (JA ちばみどり営農センター飯岡)
		13	海匝地区指導農業士会 定期総会 (旭市内)
		13	JA ちばみどりミニトマト研究会栽培講習会 (JA ちばみどり本店)
		13	メロン農業女子スキルアップセミナー (JA ちばみどり飯岡支店)
		16	銚子西瓜組合土壌講習会 (JA ちばみどり営農センター銚子)
		17	旭ミニトマト部会目揃え会 (旭市内)
		18	銚子市新規就農者激励会 (銚子市役所)
		23	そうさ施設園芸部いちご部会中間検討会議 (JA ちばみどり営農センターそうさ)
		27	そうさ自主開発米研究会水稻栽培講習会 (JA ちばみどり営農センターそうさ)

活力ある海匝農業をめざす普及活動

発行年月 令和8年3月

発行 千葉県海匝農業事務所改良普及課

〒289-2504 千葉県旭市ニ 1997-1

TEL 0479-62-0334

FAX 0479-62-4482

URL <https://www.pref.chiba.lg.jp/ap-kaisou/>

